

## JOMF 派遣医師便り (2012. 11)

### ◆シンガポール◆

## シンガポールの医療状況～専門医

### シンガポール日本人会クリニック

日暮 浩実

シンガポールの日本人医師は、シンガポール政府との取り決めですべて一般医として登録されています。一般医とはいわゆるなんでも屋です。風邪でも下痢でも、怪我でも、皮膚科でも整形外科でもなんでも診るということです。外来で診察、処置し、お薬を処方します。また、日本人医師はシンガポール政府との取り決めで、入院患者さんを担当することはできません。

病気の程度が重く、専門的な診察、治療が必要な場合には、適切な現地の専門医をご紹介しますこととなります。(日本語を十分に解するシンガポール人専門医はいませんので、コミュニケーションの問題生じることがあります。ただ、その際には、どのクリニックでも通訳をアレンジすることができます。)

入院となった場合、日本人医師は患者さんを直接担当することはできませんが、病室を訪問し、現地医師との仲介役になることはできます。患者さんやそのご家族の方々は看護師など病院スタッフとのコミュニケーションが難しいときもありますが、多くの方はすぐに慣れ、当初心配していたほどではないと感じられることが多いようです。

入院した場合、ご紹介させていただいた専門医がそのまま、入院患者さんの担当医となるわけですが、日本の病院と異なり、それらの医師は病院直属ではありません。日本の医師は病院に雇われ、病院の中に、内科、外科などの科がありますが、シンガポールの病院には科はありません。といいますか、病院直属の医師はほとんどおりません。医師はどこにいるのかと申しますと、ほとんどの医師は、病院の近傍に存在する医療センターの中に部屋を借りて、自身のクリニックをもつ開業医として存在しています。そうした医療センターに自身のクリニックを持てる開業の医師は、病院に患者さんを入院させる権利をもっていますので、必要に応じて患者さんを入院させられるということになります。開業医になると入院患者さんを持たなくなる日本と根本的に異なる点です。様々な、専門を持つ医師がおりますので、その集合体が結果として、日本の病院の科の役割を果たすこととなります。

結果として、同じ専門を持つクリニックも複数存在することになり、専門医同士もお互いに個人的な競争相手となります。しかし、お互いに競争ばかりして反目しているかというところではありません。専門医は年に何度か学会に出席しなくてはなりません。また、男性医師の場合は、兵役（シンガポールの男子は2年間の兵役後も年に2週間ほど訓練がある。これはすべてに優先する）、其の他で、患者さんを診られないことが必ず起こります。入院患者さんを担当していることが常ですから、このままでは大変困ったこととなります。その解決策として担当医が不在の時は、別の医師（この医師も当然、開業医です）がその代わりをするというシステムが出来上がっています。良い意味で、競争と協力がバランスしています。

例えば、ある医師は年に何度かアメリカやヨーロッパの学会に出席しますし、またある医師はチベットやアフリカに医療ボランティアとしてそれぞれ年に10日以上行く一方で、一週間以上の連続休暇もとるなど、日本では一部の団体に所属する医師にしかできない活動を一般の開業医が精力的に行えています。

シンガポールの医師の数は人口比では日本より少し少ないくらいです。それでも、こうしたことが可能なのは医療の人的資源が効率的に働くようなシステムになっているのではないかと思います。効率的なシステムができれば、医師数も少なくて済み、費用対効果も上がるのではないかと考えます。